

太宰春臺の『論語』解釈に関する研究

学位論文内容の要旨

本論文は、太宰春台（1680～1747）の思想について、その『論語』解釈を中心に考察を加えたものである。江戸時代の儒学者である春台の『論語』解釈の特色を明らかにするには、官学である朱子学の解釈を踏まえた上で、伊藤仁斎や荻生徂徠の『論語』解釈と比較するのが有効な方法であると考えられるが、本論文では、春台の『論語』解釈の特徴を探るために、春台が師と仰いだ荻生徂徠（1666～1728）の解釈、徂徠が批判した朱子学者の伊藤仁斎（1627～1705）の解釈、さらに溯って伊藤仁斎が基づいた朱熹の「論語章句集注」と比較対照しつつ、考察を加えている。また、それぞれの解釈の特徴および時代的な意義についても考察を加えている。

本論文は、第一部著作篇、第二部思想篇の二部から構成されている。

第一部では、本論文で研究対象とする春台、および比較の対象とする仁斎・徂徠について基礎的な研究を行っている。

第一部第一章「仁斎・徂徠・春台の経歴—時代背景—」では、本論文で研究対象とする春台と、比較対象とする仁斎・徂徠の経歴について、それぞれが置かれた時代背景を含めて確認し、「古学派」と呼ばれた仁斎・徂徠・春台の思想的な変遷を辿っている。第一章では、仁斎・徂徠・春台の経歴について概観し、仁斎は、三十歳頃までは熱心な朱子学者であったが、三十半ば過ぎからは「古義学」という独自の学派を確立したこと、徂徠も若い頃は朱子学者であったが、古文辞との出会いによって、古文辞学派という独自の学派を確立したこと、春台もやはり朱子学者であったが、仁斎や徂徠の影響を受けて、徂徠に入門し経学・経世学面の後継者となった経緯を確認している。

第二章「『論語』に関する著作」では、本論文で扱う仁斎『論語古義』・徂徠『論語徴』・春台『論語古訓』『論語古訓外伝』について、成稿時期、刊行事情について考察を加え、本論文で用いる底本を選定し、仁斎・徂徠・春台のそれぞれが『論語』をどのように経書中に位置づけているのか、考察を加えてそれぞれの相違を明らかにしている。仁斎『論語古義』は、仁斎自身が終生修改を続け、死後に嫡子東涯の校定を経て刊行されたものであるため、仁斎の思想を研究するには生前の最終稿本「林本」を研究対象とする必要があるが、閲覧の利便性および徂徠や春台の目睹の確実性を考慮して、刊本『論語古義』を底本としている。徂徠『論語徴』も、その死後に門人の手によって刊行されているが、仁斎の著作ほど改編の問題は無いため、最も古い元文二年刊『論語徴』を底本としている。春台『論語古訓』『論語古訓外伝』は、春台自身が生前に刊行しているため、最も古い元文四年刊『古訓』・延享二年刊『外伝』を底本としている。

第三章「仁斎・徂徠・春台の経書観—『論語』の位置づけ—」では、それぞれが『論語』

の価値をどのように考えているかを検証している。朱子学では、道統説との関連で「四書」(『論語』『孟子』『大学』『中庸])を最重視したが、仁斎は『論語』と『孟子』を一括りにして経書の最高位に位置づけていたこと、徂徠は、『論語』を神聖視する仁斎の見方を否定して、六経を最上位に置き、『論語』を六経の次に位置づけていたこと、春台は、師説に従い『論語』を六経よりもやや低く位置づけていたが、春台の場合は、六経と『論語』の地位の差は小さいと指摘している。

第二部思想篇では、仁斎・徂徠・春台の『論語』解釈を中心として、比較検討を行い、春台の思想の特徴を探っている。

第一章「徂徠と春台の性説について—『論語』陽貨篇「性相近」「上知下愚」章の解釈を中心として—」では、古来より人の性について論じたものとされる『論語』陽貨篇「性相近」章および「上知下愚」章の解釈を通じて、朱熹・仁斎・徂徠・春台の性説の比較を行い、春台の『論語』解釈の特徴、意味を考察している。第一章では、朱子学の「本然の性」「氣質の性」という二重構造の見方に対して、仁斎・徂徠・春台がどのように性を捉えていたかを確認している。仁斎は、「性」は「氣質の性」にほかならないとし、朱子学の「本然の性」の存在を否定し、後天的学習を強調したこと、孔子の「性相近し」と孟子の性善説は同じものだと主張していること、徂徠は、性を「氣質の性」として一元的に捉え、生まれ持った氣質の性は変化するものではなく、「中人」は学問によって各自の氣質の性に基づいた才を養い完成するという、氣質不変化説を主張し、孔子の真意は「勸学の言」であるとし、学問の有効性を主張していること、春台は、荀悦『申鑒』と韓愈「原性」からの影響を受けて性三品説を主張し、聖人の教えは大多数の「中品の性」を持つ人々のために存在するとし、中品の人は学問によって上下することができると主張したこと、徂徠よりも『孟子』排撃の程度が激しいのが、春台の特徴であること等を確認している。

第二章「徂徠と春台の管仲評価」では、孔子が『論語』八佾篇では「管仲の器は小なるかな」と貶め、憲問篇では「其の仁に如かんや、其の仁に如かんや」、「管仲微かりせば、吾其れ髪を被り衽を左にせん」と賞賛している事例を取り上げ、孔子の一見矛盾した管仲評価について、それぞれの思想家が整合性を持たせようとする解釈の中にそれぞれの思想的特徴が現れていると見る観点から、仁斎・徂徠の解釈と比較して、春台の解釈の特徴を探っている。第二章では、『論語』に見える管仲への言及をどのように解釈するかという観点から、仁斎・徂徠・春台の思想的特徴を探り、朱熹や仁斎は管仲の政治的功績よりも個人の節義を重視する傾向があったのに対し、徂徠や春台は個人の節義を重視せず、「濟世安民の功」という政治的功績を重視していることを検証している。朱熹や仁斎は仁を個人の心の徳と見なすため、行いに問題のある管仲の仁を積極的に認めることはないが、徂徠や春台は、「夫れ仁、民を安んずるより大なるは莫し」というように仁を為政者の徳として見なして、管仲を最大限に評価していることを明らかにしている。

第三章「徂徠と春台の王覇論批判」では、『論語』と深い関わりのある『孟子』を取り上げ、仁斎・徂徠・春台の『孟子』とその王覇論に対する見解を比較検討し、第二章の管仲評価と関連づけて、春台の思想的特色について考察を加えている。その結果、『孟子』に関しては、朱子が「四書」の一つとして重視し、仁斎も『論語』と並べて最高位に位置づけていたのに対して、徂徠は、孟子を諸子百家と見なし、『孟子』の評価を下げていること、春台が、徂徠の見方を踏襲し、徂徠よりも激しく『孟子』を批判していることを確認にしている。王覇論については、仁斎が厳密に王道と覇道の違いを論じるのに対して、徂

徠は、王覇の違いはそれぞれが置かれた「時」（時代）と「位」（地位）に拠る違いにすぎないとし、朱熹や仁斎のように厳密に王覇を区別することを批判し、春台は、朱熹や仁斎の王覇論を真っ向から否定し、王道と覇道とを同質で連続するものと見なす独自の解釈をしていることを論証している。本章では、春台が、「能く伯たる者は、王の漸なり」と述べているように、覇道が発展して王道になると考えていたため、王覇の相違を量的差違と見なし、従来の説より覇道を高く評価したことを論証している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 佐 藤 鍊太郎
副 査 教 授 三 木 聰
副 査 教 授 卯 和 順

学位論文題名

太宰春臺の『論語』解釈に関する研究

本論文は、太宰春台（1680～1747）の思想について、その『論語』解釈を中心に考察を加えたものである。江戸時代の儒学者である春台の『論語』解釈の特色を明らかにするには、官学である朱子学の解釈を踏まえた上で、伊藤仁斎や荻生徂徠の『論語』解釈と比較するのが有効な方法であると考えられるが、本論文では、春台の『論語』解釈の特徴を探るために、春台が師と仰いだ荻生徂徠（1666～1728）の解釈、徂徠が批判した朱子学者の伊藤仁斎（1627～1705）の解釈、さらに溯って伊藤仁斎が基づいた朱熹の「論語章句集注」と比較対照しつつ、考察を加えている。また、それぞれの解釈の特徴および時代的な意義についても考察を加えている。

春台は、徂徠の經学・經世学の継承者を自任し、また徂徠没後の徂徠学派の振興に功があった人物と見なされているが、たとえば丸山真男氏が「徂徠学以上の理論的發展は見られなかった」（『日本政治思想史研究』）と評しているように、春台の思想には、徂徠の思想からの発展性、独自性が無い、という見解もある。春台は、徂徠の忠実な高弟と評されたため、徂徠という大儒学者の影に隠れて、研究が進まなかった嫌いがある。

その反省から、尾藤正英「太宰春台の思想」（日本思想大系 37『徂徠学派』所収、岩波書店、1972）、小島康敬「儒教的世界像の崩壊と太宰春台」（『徂徠学と反徂徠 [増補版]』所収、ペリかん社、1994）等では、徂徠と春台の思想的相違について言及されているが、『論語』解釈の面から本論文ほど詳細に考察した論考はない。

本論文は、第一部著作篇、第二部思想篇の二部から構成されている。

第一部では、本論文で研究対象とする春台、および比較の対象とする仁斎・徂徠について基礎的な研究を行っている。

第一章「仁斎・徂徠・春台の経歴—時代背景—」では、本論文で研究対象とする春台と、比較対象とする仁斎・徂徠の経歴について、それぞれが置かれた時代背景を含めて確認し、「古学派」と呼ばれた仁斎・徂徠・春台の思想的な変遷を辿っている。第一章では、『論語』の各種の版本について、書誌学的見地から通時的に分析・整理しており、江戸時代における『論語』のテキスト系統を知る上で役立つ業績として評価できる。

第二章『論語』に関する著作」では、本論文で扱う仁斎『論語古義』・徂徠『論語徴』・春台『論語古訓』『論語古訓外伝』について、成稿時期、刊行事情について考察を加え、

本論文で用いる底本を選定し、仁斎・徂徠・春台のそれぞれが『論語』をどのように経書中に位置づけているのか、考察を加えてそれぞれの相違を明らかにしている。

第二部思想篇では、仁斎・徂徠・春台の『論語』解釈を中心として、比較検討を行い、春台の思想の特徴を探っている。

第一章「徂徠と春台の性説について」では、古来より人の性について論じたものとされる『論語』陽貨篇「性相近」章および「上知下愚」章の解釈を通じて、朱熹・仁斎・徂徠・春台の性説の比較を行い、春台の『論語』解釈の特徴、意味を考察している。なお、本章は、「古文辞学派の性説について」と題して、『中国哲学』第36号（北海道中国哲学会、2008年8月）に発表した論文である。

第二章「徂徠と春台の管仲評価」では、孔子が『論語』八佾篇では「管仲の器は小なるかな」と貶め、憲問篇では「其の仁に如かんや、其の仁に如かんや」、「管仲微かりせば、吾其れ髪を被り衽を左にせん」と賞賛している事例を取り上げ、孔子の一見矛盾した管仲評価について、それぞれの思想家が整合性を持たせようとする解釈の中にそれぞれの思想的特徴が現れていると見る観点から、仁斎・徂徠の解釈と比較してを通じて、春台の解釈の特徴を探っている。なお、本章は「太宰春台の『論語』解釈—管仲評価と朱子学批判—」と題して、『研究論集』第八号（北海道大学大学院文学研究科、2009年1月）に発表した論文である。

第三章「徂徠と春台の王覇論批判」では、『論語』と深い関わりのある『孟子』を取り上げ、仁斎・徂徠・春台の『孟子』とその王覇論に対する見解を比較検討し、第二章の管仲評価と関連づけて、春台の思想的特色について考察を加えている。なお、本章は「古文辞学派の王覇論批判」という題名で、『中国哲学』第35号（北海道中国哲学会、2007年8月）に発表した論文である。第二部は、発表論文に加筆・修正を加えたものである。

本論文は、朱熹、仁斎、徂徠、春台の四者の『論語』解釈を取り上げて比較するにあたり、資料を丹念に正確に解読し、緻密な分析を加え、四者それぞれ解釈の特色と思想的背景を明らかにしている。太宰春台の『論語』解釈というよりは、江戸時代中期の『論語』解釈、徂徠学派の『論語』解釈と呼べる豊富な内容を備えた手堅い研究として高く評価できる。